

スウェーデン若者参画視察報告書

2012

YEC・RRRプロジェクト 共著

目次

はじめに	1
視察概要	2
ヤング・クリス	3
フリースヒューセット	8
アンドラ・ヘメット	15
カールシュタッド市	22
クリスティネハムン市	30
感想	37
あとがき	39

はじめに

このスウェーデン若者参画視察報告書は日本での若者参画を推進していくために先進的事例を紹介しているものです。今回我々は5か所の地方自治体やユースセンター¹、団体などを視察、インタビューし、その結果をまとめ、報告書にしました。

スウェーデンは若者参画について極めて先進的な事例を持っています。そういった先進的な事例が「民主主義」に重きを置いた国民性から生まれ、その考え方がいかに徹底されているかがこの報告書からお分かりいただけるかと思います。我々は当初、スウェーデンの「ユースワーク」について調べようと思い視察することになりました。ところが実際に視察した結果、ユースワークはもちろんですけれどもあまりにも民主主義について考えさせられることとなりました。そして、民主主義の考えによってスウェーデンのユースワークが成り立っていることも分かりました。

日本に暮らしていると民主主義について考えることなどほとんどないと思います。是非、この報告書を読んでいただいて民主主義とは一体何なのか。そして若者参画がなぜ必要なのかを考えていただきたいと思います。

日本においても若者が社会の一員として認められ、参画していくことができるようになってほしい。そのような思いを込めてこの報告書を作りました。是非読んでいただき、そのことを皆様のご活動に反映させていただければと思います。

最後に、今回の視察をサポートして頂いた両角達平さん、視察先の皆様、ご協力して頂いたすべての方々に感謝申し上げます。ありがとうございます。

¹若者の余暇活動を促し、また社会参画を推進していくことを目的として作られている施設

視察概要

◆ 視察の目的

スウェーデンは、若者参画の最も先進的な取り組みがなされている国の1つである。
今回の視察では、スウェーデンのさまざまな地域の若者参画の現場を訪れ、学び、日本での若者参画のために何が必要かを探る。

◆ 視察の概要

◇ 期間

2012年6月9日（土）～6月17日（日）

◇ 参加者

櫻井龍太郎（RRR プロジェクト、法政大学3年生）
逢坂郷実（YEC、静岡県立大学3年生）
佐野仁美（YEC、静岡県立大学4年生）
両角達平（YEC、静岡県立大学4年生、ストックホルム大学留学中）

◇ 訪問先・日程

日程	訪問先
6月11日（月）	ヤング・クリス
6月12日（火）	フリースヒューセット アンドラ・ヘメット
6月14日（木）	カールシュタッド市
6月15日（金）	クリスティネハムン市



元受刑者の若者の社会復帰を助ける

ヤング・クリス



Young KRISのインタビューに参加したメンバーと



日時 2012年6月11日（月）

場所 スtockホルム市 ヤング・クリス事務所

先方 Jimmy Lenefjall（ヤング・クリススタッフ、ストックホルムのヤング・クリスの立ち上げに携わった。20代前半の若者）

Anders Jordnåra（ヤング・クリススタッフ。20代前半の若者）

当方 通訳：両角達平（静岡県立大学4年（ストックホルム大学留学中））

佐野仁美（静岡県立大学4年）

逢坂郷実（静岡県立大学3年）

櫻井龍太郎（法政大学3年）



Jimmy（手前）とAnders（奥）

概要

ヤング・クリス（スウェーデン語では Unga KRIS。Youth KRIS とも）は、かつて刑務所での服役やドラッグ依存、アルコール依存を経験し、それを脱した若者が、現在そのような同じ境遇から社会復帰を目指そうとする若者を支援するという組織である。支援対象となる若者は 13～25 歳であり、年長の若者がより年少の若者のために働いている。2006 年に KRIS（クリス）²の一つの事業として始まり、2009 年に組織として独立した（現在も連携はしている）。ストックホルムに支部ができ活動が始まったのは 2011 年 12 月 15 日から。現在はスウェーデン内に 14 の支部がある。

クリスには「正直 (Honesty)」「ドラッグ禁止 (Drug-free)」「友情 (Friendship)」「団結 (Solidarity)」という 4 つの原則があるが、ヤング・クリスでもこれらの原則が守られて活動が行われている。

ヤング・クリスのホームページ URL : <http://www.ungakris.se/>

活動 1 やりたいことのサポートと余暇活動

メインとなる活動は、若者がやりたいことをサポートすることと余暇活動である。ヤング・クリスへ来る若者たちに「何か手伝うことはありませんか？」と尋ね、彼らがやりたいと思っただけでできるような支援をする。余暇活動では、フットボールやバレーボールをしている。暴力や犯罪、ドラッグ、アルコールを行わないために、代わりとなる他の楽しみを提供しているのだが、これも若者からの声によって成り立っている。若者たちからフットボールがしたいという要望があれば、フットボールチームを作るのである。サポートを受けてやりたいことができるようになった若者は、自分がヤング・クリスのメンバーだと感じることによって、暴力や犯罪、ドラッグ、アルコールを行わないようになる。また楽しい余暇活動は、ヤング・クリスへ新たなメンバーを引き寄せることができる。

他にも、ヤング・クリスへ来る若者を対象にした学び合いのワークショップ (study circle) も開いている。暴力について、ドラッグについて、自尊感情について、ヤング・クリスについてということから、iPhone の使い方について、外国語について、健康について、料理についてなど、メンバーが知りたいことは何でもワークショップのテーマになる。

活動 2 自らの経験を活かす

ヤング・クリスは居場所を構えているだけでなく地域社会の中でも活動しているが、少年刑務所へも赴き、そこにいる若者を社会で迎えるための活動もしている。少年刑務所

²元受刑者と元ドラッグ依存者が、自らの経験を活かして新たに社会復帰を目指す元受刑者と元ドラッグ依存者を支援する組織。1997 年に、元受刑者の Christer Karlsson らが、当時元受刑者のための支援があまりにも少なかったために創設した。ヤング・クリスの対象者より年長（26 歳～）の大人が支援対象者。スウェーデンで始まった組織だが、国外へも活動（支部）が広がっている。クリスのホームページ URL : <http://www.kris.a.se/>

から電話でヤング・クリスに相談をすることもできる。ヤング・クリスには刑務所での服役を経験しているスタッフがいるので、刑務所内でストレスを感じる若者たちの気持ちをよく理解することができる。若者の話を聞く他に、ヤング・クリスの存在を知ってもらい、若者の社会復帰を手助けするための活動も行っている。少年刑務所でヤング・クリスのメンバーが自分のこれまでの人生を「私はかつてあなたたちのようだった」と話し、若者たちにとってのロールモデルになろうとするのである。少年刑務所の自由外出の期間には、話を聞いた若者たちがヤング・クリスへやって来ることもある。

他に、学校へ赴き自分のこれまでの人生を話したり、暴力をテーマに話をすることもある。暴力の話では、なぜ暴力をふるってしまったのか、暴力が自分に与えた影響などを話す。多く人は、暴力をふるう人は悪い人、邪悪な人だと考えているが、話を聞くとそうではないということに気付くことができる。

子どもたちにダンスや歌（ラップやヒップホップ）の作り方を教えたり、一緒に演劇をしたり話す練習をしたりするプロジェクトもある。目的は、ダンスや歌作りなどを通して暴力や犯罪、ドラッグ、アルコールについて教え、それらに代わる他の楽しみの方法を示すこと、またヤング・クリスの存在を知ってもらうことである。暴力や犯罪、ドラッグ、アルコールについて教えるときには、ヤング・クリスのスタッフ自らの経験を話している。このプロジェクトは、ストックホルム市郊外の Varby Goad（ヴォルビーゴード）という地域で、ABF（アビエフ）³という他の教育組織の施設を借りて行われる。ヤング・クリスの対象者よりも年少の子どもたち（9～12歳）を対象にしており、メインプロジェクトではなくサブプロジェクトである。彼らの住むヴォルビーゴードは、移民が多く、社会からアウトサイダー化している人も多い。そこで、若者の犯罪を予防するためにこのプロジェクトが行われている。



ヴォービーゴードのアビエフの施設



アビエフでのインタビューのようす

³ スウェーデンで最も大きな教育団体で相互的な勉強会（スタディサークル）の機会を提供している。社会民主党がバックアップし 1912 年創始。民主主義、多様性、正義、公平を基礎とし、人々が重要な社会問題から実践的な言語や仕事に関する勉強などまで、共に学び意見を形成することを目的としている。全国各地に支部があり、すべての人々に開かれたさまざまなテーマでの学び合いのワークショップを行っている。社会民主党の広報活動の一環という見方もある。アビエフのホームページ URL : <http://www.abf.se/>

活動3 リハビリテーションプログラム

リハビリテーションプログラムは、8週間のプログラムで、ドラッグ、アルコール、暴力やその影響についての話をするミーティングと、運動やトレーニングなどの活動を行う。若者は、刑罰の代わりに措置としてヤング・クリスのリハビリテーションプログラムを受けることができる。リハビリテーションプログラムを受けるか、他の刑罰（刑務所での服役や罰金など）を受けるか、裁判の中で若者自らが選ぶことができるのである。

質問

Q. Jimmy はどのような経験を経て今ヤング・クリスでスタッフをしているのか？

A. 私は11歳か12歳のときに初めてドラッグを使用した。また15歳のときには暴力事件を起こした。それらの罪で2004年から2006年までの2年間少年刑務所で服役し、2年間の最後の3か月のアフタートリートメントという期間（社会復帰のための期間）を、ヤング・クリスで過ごした。少年刑務所のスタッフに、新しい仲間を作るのにヤング・クリスを勧められ、その後家に戻ったときにコンタクトをとった。そしてノルショップという地域にあるヤング・クリスのメンバーとなり、私のヤング・クリスでのキャリアが2006年から始まった。

2006年から2007年までの1年間はノルショップのヤング・クリスで過ごしていたが、その後再びドラッグや犯罪に手を染め、ヤング・クリスから離れて2007年から2010年までの3年間を過ごした。その後2010年から2011年まで再び少年刑務所で服役した。ヤング・クリスは少年刑務所にいた私にコンタクトをとり、私を再び助けてくれた。そして2011年12月、ストックホルムでヤング・クリスを立ち上げるメンバーとなった。

Q. Jimmy のヤング・クリスでの今後のビジョンは？

A. ヤング・クリスをもっと大きな組織にしたい。スウェーデンのすべての学校、少年刑務所で活動が行えるようにしたい。元受刑者の若者もそうでない人も、すべての人がヤング・クリスの存在やそのコンセプトを知っているようにしたい。より多くの若者が犯罪やドラッグを始めないように支援していきたい。

Q. ヤング・クリスへ来る若者たちは、その後どうなっていくのか？

A. ヤング・クリスで時間を過ごし、やがては社会に戻っていく。仕事を見つけたり学校へ行ったりする。ヤング・クリスは、若者自身が進みたいと思うもうひとつの道をサポートする。そのために、若者が仕事や学校を探すのを手伝ったりする。ヤング・クリスに残り、ここで仕事をするということもできる。

Q. 若者と話すときに大切にしていることは？

A. 私もかつて同じ立場だったと話し、経験や気持ちを共有すること。それは普段の生活

においてというより危機に直面したときに重要になる経験である。例え若者が再びドラッグを使用しても、私たちヤング・クリスはいつでもここにいてあなたが戻ってくるのを歓迎するということを伝えている。

Q. 「正直」「ドラッグ禁止」「友情」「団結」の4つの原則はどのように活かされているのか？

A. ヤング・クリスでは特に「団結」を大事にしている。これは、フレンドシップ（友情）でなくフェローシップ（仲間、協力）を感じることである。フレンドシップは2人との関係で、フェローシップはより大きな関係である。自分が大きなフェローシップ（コミュニティ）の一部であると感じられることは重要なことである。何かの一部であると感じられれば、孤独ではないと思えるからである。Jimmyはかつてドラッグを使用していたとき、自分は孤独だと考えていた。10人の友達がいる、ドラッグやアルコールで気分が高揚しているときでさえ孤独だった。孤独ではないと感じられれば、誰も攻撃せず、ありのままの自分であることができる。

また「正直」について言えば、ヤング・クリスの特徴的なルールとして、お互いの陰口を決して言わないということが挙げられる。もしJimmyが馬鹿なことをしていると思ったら、他の人ではなく、Jimmyと顔を合わせて直接伝えるのがルールなのである。怒りや悲しみも直接伝える。グループの中では正直であることが大切である。

Q. 若者にコンタクトをとるとき、拒まれることはあるのか？

A. 拒まれるということはない。なぜなら若者自らがしたいと思ってヤング・クリスにコンタクトをとる以外のケースはないからである。ヤング・クリスの助けを求めている人は助けられない。若者が自分で自分の問題を認め、来たいと思ったときに来るのである。ヤング・クリスは、若者が来てくれれば何でも助けることができる。

ストックホルムのユースセンター

フリースヒューセット



日時 2012年6月12日(火)

場所 フリースヒューセット (FRYSHUSET) スtockホルム中央駅から南に約5kmのところに位置

先方: ロバート・オレル (Robert Örel)

フリースヒューセットの職員であり「EXIT」プロジェクト担当者

当方: 通訳: 両角達平 (静岡県立大学4年 (ストックホルム大学留学中))

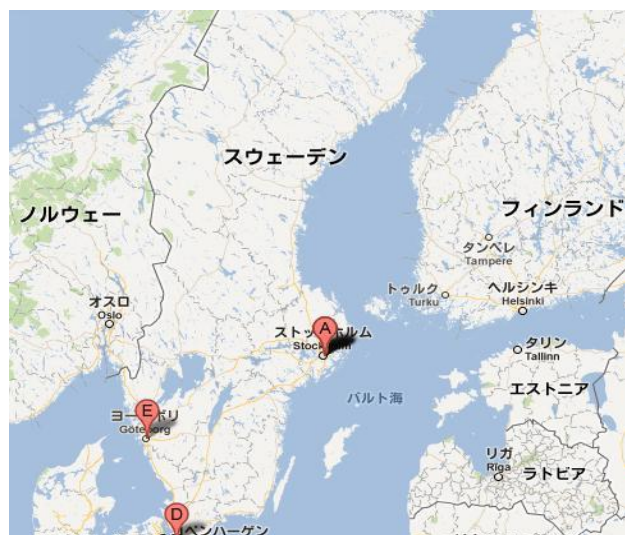
佐野仁美 (静岡県立大学4年)

逢坂郷実 (静岡県立大学3年)

櫻井龍太郎 (法政大学3年)

概要

スウェーデンの首都ストックホルムは面積 6,519 km²、市人口約 86 万人、都市圏は約 209 万人 (2011 年統計) とスウェーデンの最大都市である。フリースヒューセットはストックホルムに本部を置き活動している。(地図A) スtockホルム中央駅から南に約5kmのところに位置している。ストックホルムだけでなく二番目に大きい都市、ヨーテボリ (地図E)、



三番目に大きい都市、マルメ（地図D）にも支部を構えて活動を行っている。フリースヒューセットはスウェーデンでは有名なユースセンターであり都市部を中心に活動しているため規模も大きい。ストックホルムのフリースヒューセットの職員数は約 500 人、毎月約 4 万人の利用者がいる。今回私たちはストックホルムのフリースヒューセット本部を訪問し、施設見学とお話しを伺った。フリースヒューセットには余暇活動をする建物と学校の建物がある。

設立背景

フリースヒューセットは 1984 年に設立された。代表のアンダース・カールバーグ（現在 69 歳）は、1968 年の学生運動の闘士であり、設立当初の本業は建設業で、YMCA⁴ のバスケットボールのコーチをしていた。

当時使われていなかった冷凍倉庫を使用して活動を始めたことがこの組織の由来にあたる。（FRYSHUSET はスウェーデン語で冷凍室という意味）

当時のスウェーデンの学校や社会では生徒に知識だけを育むことだけに専念しており、若者や生徒の好奇心を育むことをあまり重視していなかった。またユースクラブ（部活のようなもの）がない中等学校のために、「従来の学校よりももっと魅力的な学校にしよう」ということで、スポーツや音楽等の余暇活動を組み込んだ学校を設立した。

その後とある事件をきっかけにして若者の声を聞き、問題解決アプローチをするソーシャルプロジェクトの活動が生まれた。

そのきっかけが 1986 年夏にストックホルムで巻き起こった移民による暴動である。スウェーデンの政府はこの問題に介入しこの状況の改善をフリースヒューセットに依頼をした。その依頼を受託し、活動を通じて明らかとなったのは、ほとんどの若者が暴力を遺憾に感じていること、そしてそれを打ち消す方法やどうやってよりよい将来を築いていくかの多くのアイデアを持っていたということであった。その事件をきっかけに、フリースヒューセットは学校・余暇活動だけでなく、若者の生きている社会の中にある課題解決の活動を行う事になっていった。

Mission

- ・若者の声を聞き若者と関係を築くこと。
- ・熱意を受け入れ彼らの声を聴いて考え開発をしていき共同体の創造をしていく。それを通じて若者の自己肯定感高める。
- ・若者の視点とアイデアを社会に取り入れるために活動する。
- ・すべての若者、排除に陥るリスクにある若者にも焦点をあてて活動をする。

⁴ YMCA (Young Men's Christian Association: キリスト教青年会) は、キリスト教主義に立ち、教育・スポーツ・福祉・文化などの分野の事業を展開する非営利公益団体である。日本にも東京・大阪・横浜を始め多くの支部がある。

- ・社会で何が起きているのかを把握し、迅速にそれに対して行動を起こす。

活動

フリースヒューセットでは大きく分けて3つの活動分野がある。

教育プロジェクト・余暇活動（Passionate Interest） ソーシャルプロジェクトである。

1. 教育

フリースヒューセットでは、3つの学校を運営している。フリースヒューセットは民間団体であるため私立学校である。13歳から15歳までを対象にした中学校。（およそ150人が通っている）16歳～18歳までのギムナジウムという高校。（1000人） Folk High School という18歳以上ならなれでも入学可能な学校であり仕事の為の資格が取れる学校である。

ただ勉強をするだけではなく、バスケットボール、スケートボード、ダンス、演劇、音楽、画像、デザインやゲーム等の余暇活動を沢山提供している。遊びの余暇活動は若者の学びを育む有効なツールだと考えられている。ただ読み書きをするだけでなく、スウェーデン語でバスケット、ダンスやラップなど、若者たちに関心のあることでスウェーデン語を学びそれをモチベーションにつなげたりする。そのほかにも多様な若者（男の子、女の子、アラブ系・・・）と男女混合でバスケットを行う。その活動の中で人権、平等を学んだりスウェーデン語が学べたりするようにデザインされている。ほかにも若者が社会起業家となれるための育成や研修を行うプロジェクト等もある。



校舎の外観



約15人サイズの教室の様子



パソコンを使う事が出来るスペース



図画工作する教室の様子

2. 余暇活動

余暇活動は学校にも反映されているがオープンな活動である。体育館、スケートボードパーク、レコーディングスタジオ、ステージ、クラブ、DJスタジオ、シアター、食堂などの施設も完備されている。利用者数は約2000人～3000人がバスケットボール、4000人～5000人がスケートボード、600～700人が音楽活動や、楽器演奏、ダンスを行うために利用をしている。



ロビー。ハードロックなどの
バンドのポスターが掲示されている



スケートボードパーク

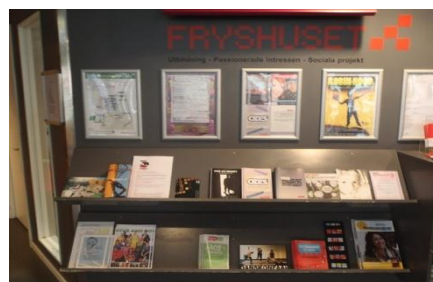


体育館

3. ソーシャルプロジェクト

現在フリースヒューセットでは多様なソーシャルプロジェクトを展開している。ターゲットを絞ったアプローチを行っているのが特徴である。それぞれのプロジェクトには必ず専門の資格を有している職員を配属させており、さらに専門の職員も若者と同じ辛い経験をしたことのあるワーカーが多く、若者の気持ちに共感してよりそうことができるので関係を築きやすい。

フリースヒューセットはNGOであり民間団体であるので活動資金も各プロジェクトそれぞれで助成金をとっているのが特徴である。



ソーシャルプロジェクトを
紹介しているブース

以下がフリースヒューセットが現在行っているソーシャルプロジェクトである。

1 The Bridge Builders (ブリッジビルダー)

少年と青年男性で構成されている。スポーツ、キャンプ、調査、慈善活動、勉強、議論など様々な活動をする。

2 Chaplin (チャップリン)

ドラッグやアルコール中毒の親を持つ子どものための自立支援プロジェクトである。

3 CIDES - Centre for information about destructive sub-cultures

(暴力的なサブカルチャーについての情報センター)

CIDES は暴力的なグループ (サッカーやロックのフーリガンなど) の撲滅、グループからの離脱を促進させる活動。

4 Lugna Gatan

ストックホルムの公共交通機関内の暴力や破壊行為をなくす活動。若者が地下鉄やバスの周りに "たむろ"する若者によって引き起こされる問題を防ぐ。

5 Elektra & Sharaf heroes & Sharaf heroines

アラブ系の女性は名誉の文化によって人権侵害が問題になっている。女性を暴力から逃げることでできる安全ハウスやカウンセリングの提供。男女平等であるという価値観を変えるための研修を行っている。

6 Exit

若者のナチス、人種差別、他の過激派のような宗教団体に属している若者の離脱、社会復帰を助ける活動を行っている。

7 Fenix

若者が学校などに放火をしてしまうことを防止するプロジェクト

8 Fryshuset Web Coaches

12 歳～20 歳の若者を対象にコンピューターリテラシーを育む支援を行っている。

9 Job coach・Young-in

無職の若者の就職を手助けするプロジェクト・

1 6 歳から 2 4 歳の若者を対象とした就労支援を行うプロジェクト。

10 Mission Possible

学校の教師とうまくいかない9歳から12歳までを対象にしたプロジェクト。

11 Passus

犯罪組織から抜け出すことを助けるプロジェクト

12 Sea-life

アウトドアを体験したことのない若者とアウトドア活動をする。

13 Single mothers & Children of single mothers

余暇活動をする余裕のないシングルマザーと子どもに対してその機会を提供するプロジェクト

14 United Sisters

夜の街をたむろしている少女を家に帰らせるプロジェクト

質問

Q. Lugna Gatan の若者へのアプローチの仕方は？

A. アウトリーチのユースワークを行っている。非行をしている若者をターゲットに、Lugna Gatan をやっている若者たちがロールモデルとして示しながら支援をしている。都会にいる非行を行う若者が身近な地域にい



いことができる若者になるような支援をしている。スタッフにはもともと非行だった人もいる。ストリートカウンセリング（カジュアルな感じで若者から話を聞く。やりたいことなど、彼等の原動力を破壊的ではなく建設的な行動に導く。）ワーカー達は地下鉄、学校、街中で行う。学校がワーカーを1人雇っている（フルタイムで働く人もいる）。誰かに影響を与えたいなら、関係づくりから必要。その人個人を知っていけるようにするのが大切だ。

Q. フォルクハイスクール（18歳以上、国籍を問わない市民学校）は、職業経験の資格が取れるところなのか、中・高卒資格が取れるというわけではない？

A. 取れる資格は普通の高校と同じ卒業資格。他と違うのは余暇活動が養える。例えばバスケットを通じてスウェーデン語を学べるとか。

Q.ソーシャルプロジェクトは誰が始めたのか。若者か？

A.ソーシャルワーカー達。EXITは元ネオナチにいた人。

Q.この施設の若者による運営委員会はあるのか？

A.若者ではない。政治家や会社員など。

Q.若者による運営委員会があるユースセンターについてどう思うか。

A.素晴らしいが、ここは規模が大きいのでそれを行うのは難しい。480人スタッフがいます。運営するにはプロの知識が必要。主体としての若者の参加はない。

Q.なぜこんなに大きくなったのか。どのように。

A.社会が助けようとしないうちにフォーカスをあてて活動を行っている。

学校を辞めた子どもや、ギャンググループにいたような子など。若者たちにとって大きな変化を起こしたいから規模を広げている。

Q.施設運営のためにどのように若者の声を聞いているのか。

A.この施設は若者だけではない。高齢者用でもある。ワークショップ、議論などで聞いている。あとはバスケットなど余暇の時間に聞く。

Q.今後の展望と今後の課題

A.施設：よくわからない。政治に声を届かせる。多くの対話の場所づくり。今年の夏から始めるサポートは戦争孤児（難民）支援を始めるつもりだ。カルト教団に所属する若者へのアプローチ。フォーカスする問題：イスラム原理主義。サッカーフーリガン。

EU圏内で活動している人々とのネットワーク。

Q.スウェーデンの若者について新聞を読んだのだが、75%の若者がユースセンターを利用しないそうだが、これは多いか。

A.多い。ストックホルム、マルメなどには大きなセンターがあるが、小さなまちには無いから。

ストックホルム自治体のユースセンター

アンドラ・ヘメット



2:A HEMMET

日時

2012年6月12日14時～

場所

ストックホルム南 **Skärholmens** (ハールホルメン) 区

メンバー

先方 バギータ Department of Early Years, Youth & Leisure の責任者
Susanna Brolin Andra Hemmet の責任者

当方 通訳：両角達平 (静岡県立大学4年 (ストックホルム大学留学中))

佐野仁美 (静岡県立大学4年)

逢坂郷実 (静岡県立大学3年)

櫻井龍太郎 (法政大学3年)

概要

スウェーデンの首都、ストックホルムは14の地区に分けられており、ハールホルメンはその中のひとつの地区でストックホルムの南西部に位置している。この地域はストックホルムの中でも極めて人口が多く、移住してくる人の多い地域である。このハールホルメンにはアンドラ・ヘメット (日本語で「第2の家」) という若者の参加によって作られたユースセンターがある。今回我々はユースワークの大先輩として日本での課題を相談する形でお話を伺った。

ハールホルメンの地域的特徴

現在ストックホルムは人口約 85 万人、子どもの数が 15 万 5 千人と移住してくる人がとても多く、人口は増え続け数年後には 100 万人に達すると言われている。その中でもハールホルメンは企業も多く、地方から働きに来る人、学生、移民などが多い地域である。また面積も他の地区に比べ大きく、ストックホルム最大の図書館や映画館、プール、運動場などがある。



Department of Early Years, Youth & Leisureのオフィスにて話を伺う

ハールホルメン区には 5 つの部署があり、社会福祉、子ども・若者、高齢者・障害者、コミュニティサービス、総務に分かれている。今回訪問した子ども・若者部署では、オープンパーク（公園、一部プレーパークの要素がある）、プレスクール（幼稚園）、余暇活動のためのセンター（ユースセンター）などを行っている。

この地区の予算はストックホルム市によって住民規模などによって振り分けられる。

プレスクールは全部で 28 あり、最近始まった取り組みでオープンプレスクールというものがある。オープンプレスクールは、普通のプレスクールとは異なり、親は必ず一緒にいなければならない。単純に預けるといことはできない。親子でともにレクなどを行い親子に対して指導を行っていくという。このオープンプレスクールはとても人気で毎年 1000 人近い見学があるという。その人気のため昨年 3 か所新設した。

将来的にストックホルム市、ハールホルメンでは建設が多く問題になる。将来、青少年が増え、学校、青少年に対する圧力の問題なども出てくる。この支所にとって何が最良か、計画を立てなければならないという。

アンドラ・ヘメットの設立背景

このセンターはもともと廃れた警察の施設であった。現責任者のスザンナがハールホルメン区で働き始めた時、ほとんどの自治体の仕事の対象が大人に向けられたものであった。そのことに疑問を感じ、この地区の長にそのことをぶつけたところ、許可があり、若者向けのプロジェクトを始めることになった。

その後、地域住人を集めて対話集会を開いて、最も関心のある問題は何かを聞いたところ、ほとんどの人が若者のことを大変恐れていることが明らかになった。そして若者を巻き込んで若者のためのセンターを作ることになった。

スザンナはまず始めに立ち上げを手伝ってくれる他のユースワーカーを集め、その後、若者がいる場所に出向いて一緒に働いてくれる若者を募った。このときの目標人数は15人だったが、最終的には100人を超える若者が集まってしまった。人数が多かったので小さい異なるグループにおいてプロジェクトを進めることにした。

その中の10人の若者とこの廃れた施設を下見に行くことになった。若者達は最初自分たちがセンターをたてるということに半信半疑で、「ちょっと見にくるだけでいいから、いつでも帰っていいから」とお願いして、なんとか下見にきてもらった。予定地を実際に目の当たりにするやいなや、「もし自分がこの建物を変えられるなら、あなたの右腕になるよ!」と言った。さらに腐敗した施設の奥まで入り、全て見終わって出てくるやいなや「もし自分がこの建物を変えられるなら、あなたの左腕にもなってみせる!」と言った。こうしてプロジェクトは始まり、2005年9月5日にアンドラ・ヘメットは開館した。

施設概要

アンドラ・ヘメットには以下のような設備、部屋が整っている。

- *グレイトホール（体育館）：スポーツ活動、会議やイベントができる。
- *スタジオ：音楽の作成、記録のできる部屋。
- *ダンスホール：鏡があり全てのダンスグループが予約して利用できるホール。
- *リハーサルルーム：バンド練習のできる部屋。
- *カフェ&ラウンジ：カフェがあり、パーティーゲームなどができる。
- *Xboxのルーム：Xboxができ、映画鑑賞もできる。
- *作成ルーム：PCが設置されており、映像編集などの作成ができる。また、ミーティングやイベントの際の仕度にも利用する。



グレイトホール



リハーサルルーム



ダンスホール



スタジオ

対象年齢は基本 12 歳から 19 歳であれば誰でも利用できるが、多様な層がアンドラ・ヘメットを利用するため、例外として下記のような開館時間、年齢、性別の設定も行っている。

開館時間は基本的に 17 時から 22 時までだが、12~15 歳の若者は月曜日と土曜日は 17 時から 20 時まで、水曜日は 12~19 歳の女の子の日で、18 時から 21 時までという設定である。

アンドラ・ヘメットではすべての訪問者が参加できる活動だけではなく、若者が自ら企画、立案したものを職員と共に事業として実現することができる。以下のような活動団体がその例である。

- * STYRELSEN (センター運営委員会) : センターの運営をするグループ。一ヶ月に一回の定期的な会議で予算や、イベント、設備などセンターの若者に関する全てのことの意味決定を行う。
- * EVENTGRUPPEN : サッカートーナメントやパーティーなどのイベントを計画、実施。
- * PILA DANCERS : 12 歳~19 歳のダンスの練習やイベントの開催。
- * 127 PLAY ENTERTAINMENT : 音楽を中心にしたイベントの企画。
- * SÖNDAGSGRUPPEN (日曜日グループ) : 障害を持つ若い人たちのための活動グループ

職員は現在フルタイムで 27 名、そのほか若者によるパートタイムのスタッフが 3 名。



質問

Q どのようにより多くの若者の参加を促していますか。センターを知ってもらい、利用してもらおう最善の方法は？

A.まず、きれいな施設があり、興味をもつ事業を行うこと。そうしたら、友達に話し、セカンドホームである、アンドラ・ヘメットにやってくる。Facebookなどのインターネットも駆使する。そしてユースカウンスル⁵が若者がユースセンターにやってくるもう一つの方法。

Q ユースカウンスルはどのようにして作られたか？

A.8年から10年くらい前、多くの議論があり、市では青少年の声をもっと集めたかった。そしていくつかの組織、支所が青少年と働き始めた。これまで活発な時期、停滞した時期があった。ハールホルメンでは政治家が若者に興味があり話をしたかった。しかし若者が自分たちでやりたかったので自分たちで作った。

Q 中高生と共に活動していく中で、どこまで中高生に任せればよいのか。

A.サポーターとして何ができるか、若者の活動を支援するための土台をしっかりと作ることを助けなければならない。たとえ若者が、会議をしたくないようであってもサポーターが介入して主導権を握ってはならない。自分たちの過ちに自ら気づき、このプロジェクトを続けられないと気づき、学ぶことが重要だ。失敗してもまたプロジェクトに挑戦することはできる。サポーターが若者のプロジェクトの主導権を取ってしまったら、誰も助けることにはならない。そのためにサポーターは若者と真剣に話をしなければならない。本当にそのプロジェクトを成功させたいのかを確認しなければならない。もしそう思っていないのであれば、またやりたいと思ったら来てと言って計画を終了すべき。

もしサポーターが主導権を握って成功させても満足するのは若者ではなくサポーターだ。それは目的とはずれている。

もしプロジェクトが失敗したとしてもそれを失敗と呼ぶべきではない。若者にとっては

⁵ ユースカウンスル:政治家の下の組織としてその地区の全体について話し合うティーンエイジャーによって構成されている。目的として政治家が若者の意見を聞くということはもちろんのこと、政治家の仕事ぶりを学ぶ方法でもある。また、ハールホルメンには存在するが、どの地区にも必ずあるわけではない。

すべてが成長過程である。サポーターは結果を見るのではなく、何が失敗なのかを見極めなければならない。若者は人生の途中であるということを忘れてはならない。

あなた方にとって大切なのは若者が 16,17 歳の時に最善のプロジェクリーダーになることなのか、それとも、彼らが 20,25 歳、もっと大人になった時に最善のプロジェクリーダーになることなのか。後者であれば彼らを助け、人生を生きる支援をしなければならない。我々はプロジェクトを成功させるためにいるのではなく、若者の成長のためにいるのだから。

Q 日本の中学生に学校の校則、予算を自分たちで決めたいか、という質問をしたらそれは荷が重すぎるからやりたくないと言った。どうすれば参加の意欲を高めることができるか。

A.KASAM⁶という理論がある。これは「何らかの一部であると感じる」ということである。社会の一員であると感じるならば、何らかの一員であると感じるならば、心地良く感じるということ。大きなものの一員であると感じることが出来るならば、成長したらより安定した人格になることが出来る。

子ども・若者に、自分たちが何らかの一員であるという考えをどのように与えられるかが大事になってくる。いきなり生徒に校長を選びたいかと聞いても生徒はそのような状況に慣れておらず、自分たちのことを信じていないし、管理できるとも思っていない。生徒たちは、これは私の仕事ではない、こんなことできない、大変過ぎる、と言う。しかし、もっと小さな一歩から始めれば変わってくる。小さな一歩から始めると、私は学校の一員だと感じる事が出来る。ここに座り、これをしなさい、と言われるだけの生徒だけではなく、学校の一員であり、学校は私を必要としている、私は学校を必要としていると感じることができれば、生徒たちは校長を選びたいかと問われたときに、彼らはもちろんそうしたいと答えるだろう。どんなプロジェクトでも同じことが言える。大切なことは、小さな一歩を常に行うということだ。もし若者が間違っても、あまり厳しくしないでほしい。厳しすぎれば、彼らは後退する。そのため、彼らには時間を与え、小さな、小さな一歩を歩ませ、そうしたら、いつか、彼らは校長を選ぶだけではなく、彼ら自身が校長となっている。

⁶ SOC(首尾一貫感覚)。ユダヤ系アメリカ人の医療社会学・健康社会学者、アントノフスキー・アーロンが提唱したストレス理論。文献：『健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム』アーロン アントノフスキー (著), Aaron Antonovsky (原著), 山崎 喜比古 (翻訳), 吉井 清子 (翻訳), 有信堂高文社, 2001 年

Q なぜスウェーデンの人々は民主主義も方法、理論を知っているのか。

A.何年もかかった。毎日、私たちはいつ変わってもおかしくない民主主義のために戦わなければならない。だから、当たり前のもので考えてはならない。当然のもので考える人がいるが、これは大きな間違いだ。スウェーデンでは、ずっとこうだったわけではない。この国、社会民主党、社会労働党があったのが一因ではないだろうか。この政党は初期のころ、そのことを非常に考えていた。彼らは貧しい人のため、学校に行っていない人のためにこのことをはじめた。それが私たちも変えたのではないだろうか。また、早い時期に女性も働き始めたことも要因の一つではないか。だから学校で議論の仕方について習う。



Andra Hemmet 内の壁画は若者たちの手によって描かれたものである



KARLSTADS KOMMUN

カールシュタッド市

～ユースカウンスル、若者が社会に関われるまち～



市庁舎外観

日時 2012年6月14日(木)

場所 市庁舎(CCC)&カルチャーセンターウノ(UNO)

メンバー

先方

サナ 女性(20代後半) 市職員。大学との関係を担当

ファニ 女性(20歳前半) 市職員。ユースカウンスル(Youth Council)を担当。先代の議長。勤め出したばかり。早めに終えて、大学で法律を学びたいとのこと。

ジャン 男性(40代) カルチャーセンターウノ(UNO)のコーディネーター。なってからまだ半年くらい。若者に面接してもらって雇われた。

当方

佐野仁美(静岡県立大学4年)

逢坂郷実(静岡県立大学3年)

概要

カールシュタッドはストックホルムとオスロの間に位置している市である。ストックホルムから西へ約300kmのところであり、人口は約10万人、面積30.31km²。カールシュタッド市は太陽を市のシンボルとして掲げている。このカールシュタッド市ではユースカウンシル（若者議会）が設置されている。スウェーデンの自治体には市長は存在せず、カールシュタッド市では市議会議員61人、そのうち11人からなる執行委員会が同市の最高機関であり、ユースカウンシルは執行委員会に直属するものである。市議会の小委員会の市の取り組みについての文書がユースカウンシルに提出され、メンバーはそれを読み、文書に対してコメントやフィードバックをおこなうために議員と議論を行っている。（議会の小委員会は、市役所の部局と対応して設置されている）。このようにユースカウンシルでは若者が市の運営に携わる機会を持っている。このユースカウンシルはカールシュタッド市が独自で設置したものである。今回私たちはこのユースカウンシルの取り組みについてお話を伺い、実際ユースカウンシルによる提案で生まれた若者が余暇活動をすることができる、「カルチャーセンターユーノ（UNO）」を見学させてもらった。

ユースカウンシルの目的

まずカールシュタッド市全体として、若者だけでなく、すべての市民の声を聞くことを大事にして活動を行っている。すべての市民の声を聞き、それをきちんとまちに反映させることにより、住みやすいまちをつくるのである。そうして魅力的なまちにしていきカールシュタッド市の人口を増やしていくのが市全体の目的である。私たちが訪れたユースカウンシルもまさにそれに基づいている活動である。



ユースカウンシルの活動

ユースカウンシルはカールシュタッド市によって2002年に設立され今年で10年目である。ユースカウンシルのメンバーは25の代表と15の副代表、計40人で構成されている。最初の頃はどのように若者の声を聞くかを考え、数百人の若者を集めた会議を行ったが人数が多すぎてうまくいかなかった。そこで選挙による選抜行い議員数を少なくしたユースカウ

ンシルを設立し定着していった。対象は15歳から19歳までの市内に住んでいる若者。ユースカウンシルに参加を希望する若者は実際に学校で選挙を行って選ばれる。また学校にきていない若者には、インターネットで投票することができるようになっている。このように実際に選挙で若者が選ばれているのが特徴である。ユースカウンシルの選挙は毎年5月に行われ、立候補者は毎年90人程集まるらしい。ユースカウンシルの議員の任期は1年間。9月から翌年6月の間に全体の大きなミーティングが月に一度の頻度で開催している。会議は2～3時間程度で放課後に市議会の議場で行う。

ユースカウンシルに選ばれた若者の議員たちの最初の活動は子どもの権利条約とEUの若者政策を学ぶことからスタートする。子どもの権利条約では若者も社会の一員としての声を届ける権利があることを学び、EUの若者政策では、自分たちが住んでいるEUはどのように若者に対して政策を行っているかを知る。その認識がユースカウンシルの1年間の活動と作業において重要な役割を果たしていくことになるのだという。このように権利や政策から学ぶスタンスは特徴的である。

ユースカウンシルメンバーの役割は同市の若者たちの声を代弁することである。そして政治家と若者との対話を継続的に行うことで相互理解をすることも重要であるとしている。自分たちから話を持ちかけることもあるし、逆に持ち込まれることもあるそうだ。NGOで働いている大人とも話すし、大学教員とも話す機会がある。このようにいつでも対等に市の運営に対して距離が近く話し合うことができるのである。

若者目線で魅力的なまちを考える

ユースカウンシルは、市の運営に携わるだけでなく、同市がどうすれば魅力的な街になるかというテーマで話し合いを行い、いくつかのテーマに分かれたフォーカスグループを結成して活動をしていく。その中では学校、カールシュタットの環境問題、文化活動などの様々なテーマが出来上がり、それぞれ関心のあるグループで活動を行っていく。現在9つのフォーカスグループができあがり、それぞれでミーティングを重ねて計画をしている。全てが活発に活動しているわけではないが、このフォーカスグループは若者であれば誰でも加入することができる。Facebookを使って友達を誘うことが多い。フォーカスグループをつくる提案は、ユースカウンシルからのときもあれば、市の部局からの提案のこともある。政治家もいろんなアイデアを持ってくる。

そしてユースカウンシルからの提案の成果として、フェアトレードプロジェクトをユースカウンシルで若者が始めていたが、今ではカールシュタット市全体でフェアトレードを推進するようになった。若者による若者の安全をも守る「セーフティユース」も市で活動を行うようになった。そして若者のためのミーティングスペースが欲しいということで「カルチャーセンターUNO」が2005年に設立された。

カルチャーセンターUNO

カルチャーセンターUNOはカールシュタッド市の商店街の一角に存在している。地下があり二階建ての施設である。UNOは2005年に設立され年、現在7年目である。16歳以上の若者ための文化活動センターである。楽しい余暇活動を提供していて、バンドのためのスタジオや、ダンス、DJスタジオ、ミニシネマ、アート・クラフト工房、写真撮影スタジオや、演劇するためのステージ、カフェスペースといった充実した設備が完備されている。UNOの開館時間は15時から21時といった学校が終わって放課後に来る時間に開館している。金曜は24時まで。土曜は25時までと夜遅くまで開館している。ダンス教室だけは、朝8時から利用可能にしている。UNOの利用者は50人～200人と地方にしてはとても若者にとって人気のスポットとなっているといえよう。

目的

若者のためのカルチャーハウスであり、友だちと会う場所でもあり、創造的な活動ができる場所でもある。また若者の創造的な活動を支援することによって、カールシュタッドからアーティストが沢山生まれることで市が有名になることや成長することを期待している。

UNO 設立背景

ユースカウンスルンで若者が中高生のたまれる場所が少ないことに不満を抱き、「中高生が集まれる場所がほしい！」ということを議員に提案をした結果、設立できることになった。ここでユニークなのはどういう施設なら若者が利用したいと思うのか、同市の若者の代表として若者目線 UNO の設計やデザイン、設備のすべての計画をユースカウンスルン自身で行った。ただ自分たちの声を届けるだけでなく、すべてに関してユースカウンスルンは関わり、同市は関わるチャンスを保障しているのである。



UNOの外観

施設の様子

・カフェ

ミーティングスペースとして活用されることが多い。コーヒーやお菓子を買うことができ、その場で飲食することができる。日曜と月曜の閉館時には「Bfree」というLGBTの5人から20人の若者の（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、の人々をまとめて呼称する頭字語である。）が集まっておしゃべりをする会場になっている。



カフェスペース全体



飲食物が買える売店

・クラフト・アート工房室

洋裁、縫い物、編み物、ミサンガ、Tシャツプリントなどができる。



入り口



教室全体



手芸スペース

絵画、写真、缶バッジ作成、マクラメ、ビーズによる絵の作成、スクラップブックづくり。
自分で何かをつくりに来てよいし、毎晩やっているワークショップなどの教室に参加することもできる。



ビーズアート作業場



スクラップの展示

舞台、演劇、音楽、ファッションショーなどいろいろな催しが行うことができる。音響・照明も自分たちで習って操作してもよいし、お金を払ってプロの方を雇うこともできる。ここではセンター側で催しを企画するということはできるだけせず、UNOで起きることはすべて若者自身に任せている。基本的には、観客も若者だけ（親が来たりすることもある）



ダンスレッスン部屋



何でも発表できるステージ



証明・音響調整機材

・ミニシネマ

定員は10人。毎週新しい映画を見ることができ持ち込みもできる。



入り口



中の様子

・展示スペース

受付までの通路が作品展示スペースになっている。作品は持ち込みで UNO は額縁などを提供する。チラシ・ポスターも一緒に作り、印刷費を出して宣伝も手助けをして展示者があちこちに広報する。このように基本的には、資金面の援助とコーチングをおこなっている。訪問した時は、19歳の女性による写真展、17歳の女性によるイラスト展が行われていた。こうした若者のプロジェクトに対する資金援助も行っている。必ずしもプロジェクトは UNO の中でやる必要はなく外での活動もおこなうことができる。



写真を展示している様子

・写真スタジオ

まず講習（週1回ずつ計3回）を受けてから使うことができるルールとなっている。部屋は週に3、4回使われている。



写真スタジオ

・DJスタジオ

人気があり、いつも予約でいっぱい。これもまず講習を受ける。機械は 5000 ユーロ（約50万円）はする。



ターンテーブル

・バンドスタジオ

5 つから 6 つのグループが定期的に使っている。予約が必要。そのほか、空いていればいつ使ってもよい。



バンドスタジオ

・録音スタジオ

音楽をコンピュータで作ったり、歌を録音したりできる。近々バンドスタジオの音楽を録音スタジオに移動させて編集できるような連携をとれるようにする予定である。週に 3、4 回の利用者がいる。



音楽編集機材



Kristinehamns
kommun

若者参加の最先端

クリスティネハムン市



事務所にてお話を伺う



過去に行ったハロウィンイベントのポスター

日時 2012年6月15日(金)

場所 **Kristinehamn** (クリスティネハムン市) Youth and Democracy 部門 の事務所⁷

先方 Therese Lasson, Youth Coordinator (ユース・コーディネーター)

Åsa Askerskar, Democracy Coordinator (デモクラシー・コーディネーター)

Anne-Marie Wallouch, 市議会議員

ハンナ, Youth Democracy Forum (ユース・デモクラシー・フォーラム) のメンバー

Ida 18歳 聖歌隊の NGO Boxet に所属

当方 通訳: 両角達平 (静岡県立大学4年 (ストックホルム大学留学中))

佐野仁美 (静岡県立大学4年)

逢坂郷実 (静岡県立大学3年)

櫻井龍太郎 (法政大学3年)



Youth and Democracy部門の事務所は一軒家の2階になっている。

⁷ この事務所は一軒家の2階を使っており、市役所のすぐ裏に位置している。職員が中にある時、若者が自由に入出りでき、一種の居場所になっている。

概要



クリスティネハムンはストックホルムから特急列車で2時間程度の地にある地方都市である。ストックホルムから250km程西に位置しており、面積は13.34km²、人口は17839人、人口密度は1335/km²（2010年統計）である。この都市は2007年にYouth municipality of the year（若者自治体オブザイヤー）⁸を受賞しており若者の参画が極めて進んでいる先進的な自治体である。ユースを対象とした事業を数多く展開し、よりデモクラティックに行うことを目指しているYouth and Development部門を今回訪問し、お話を伺った。

クリスティネハムン市全体としての目的

クリスティネハムン市として掲げている目的は以下の7つである。

- ゴール1 住民は自分たちが影響力を持っていると感じるべきだ
- ゴール2 この地域は住人や来訪者にとって、自然の中での活動的、文化的な体験する機会を与える魅力的な場所である。
- ゴール3 地方行政が、きれいな自然と魅力的な場所で生活することを提供できる。
- ゴール4 新しい住民を魅了する質の高い子どもケアと学校
- ゴール5 地方行政の活動によってビジネスをするのに適したコンディションを提供する。
- ゴール6 地方行政は平等で多様性に富んだ生活環境を提供できる。
- ゴール7 人々が環境保護をより身近に感じることができるようにする。

⁸ スウェーデン青年事業庁（Ungdomsstyrelsen）により実施されている、優秀な若者施策の自治体を表彰する制度。

クリスティネハムンが 2007 年に若者自治体オブザイヤーを受賞した理由

- ① さまざまな若者活動（NGO、ソーシャルワークなど）をリスト化して統合
- ② 機会の限られた若者の包摂

失業している若者、薬物の問題を持つ若者などに対して履歴書の書き方、職業訓練、トレーニングの提供を行った。

- ③ 若者の影響力の増進

新しい点 若者の問題だけでなく、都市計画・高齢者のケアなど、町をよくするため、すべての問題に、若者の意見を求める。クリスティネハムンをどうしたいか、どうやって老人をケアするかなど、街の問題をどうしたらいいかを問うと、若者は若者自身のテーマよりも他のことに興味を持ったという。15～20歳の若者を集めて、最初は制限をかけずに話をさせる。最初は夢のようなことを言うが、お金などのことも考えて狭めていくと、100のアイデアが10になる。そして実現可能性が高まっていくのだ。しかしながら、若者が興味あることから始めることが大事である。

活動・特徴

Youth and Development 部門ではデモクラシー・コーディネーターとユース・コーディネーターが各一名配置されている。順番としてはユース・コーディネーターが配置され、その次にデモクラシー・コーディネーターが配置された。

デモクラシー・コーディネーターの Åsa Askerskar さんはもともとユース・コーディネーターで気さくなおばちゃんといった印象であった。ユース・コーディネーターの Therese Lasson さんはもともとユース・デモクラシー・フォーラム（詳しくは後述）のメンバーで赤髪のヘヴィメタル好きの女性であった。二人ともとても親しみやすい方だった。

デモクラシー・コーディネーターの目的と役割

デモクラシー・コーディネーターの目的には以下の3つが挙げられる。

- ① 若者の影響力を高める
- ② 市民対話の促進
- ③ ハイリスクの週末対策

①に関しては”youth influence”という言葉を使い、重要視されており、若者が社会に対する影響力を高めることが目的になっている。②に関しては大人も政治になかなか参加しないということで、若者だけではなく「市民」による対話の促進が目的になっている。③に関して、「ハイリスクの週末」とは例えばハロウィーンや卒業式、サンタルチアの日（12月13日）といった若者が荒れる傾向にある日のことである。そしてこのような日に警察やソーシャルワーカーとも一緒になってアルコールのないイベントを支援していくという

ことである。この活動は政治家がノンアルコールのイベントを支持したことによって始まったという。

②についてだが、デモクラシー・コーディネーターによって特徴的かつしっかりと制度化された手法が見られる。その手法とは以下の4つである。

I. 公式でない提案

簡単に電話番号と住所を記載した文章を送ることによってクリスティネハムンに住んでいる人なら誰もが提案することができる。なにか提案があった場合、議会は6か月以内に答える義務が発生する。提案内容は自由である。しかし法、民主主義に反することは禁止されている。ここで民主主義が出てくるのが実にスウェーデンらしいと言える。また、年齢制限は無く、何歳でも、選挙権のあるなしに関わらず提案をすることができる。また、より多くの人提案できるように、お年寄りや移民向けに易しく書いたパンフレットも用意し、チラシなどによっても市民に対して告知を行っている。

II. 対話集会

市民が話し合い、提案を文章にまとめて政治家に渡すイベント形式のもの。この対話集会では政治家の参加が最低3名と義務付けられている。しかし政治家は市民同士の話し合い中、決して喋ってはならない。そのことを”Small mouth but big ear”と表現していたのがとても印象的である。そしてその提案を受け取って初めて政治家は喋ることができ、対話集会、そして提案に対するフィードバックを行わなければならない。

III. ウェブ上の質問

主に苦情などに対処するために、ウェブを利用して簡単にかつ早く対応するもの。

1, 2日での回答が可能である。

IV. ウェブ上のフォーラム

ここで出た質問は市の担当者がそれぞれの分野に応じた担当者に振り分ける。政治家が分野ごとに返事をすることになっている。また、質問と答えを公表し、質問が重複することを防いでいる。

ユース・デモクラシー・フォーラム (ユース・コーディネーター担当)

13歳～25歳の若者を構成員として、提言活動といった場面で政治家とつながる役割を担い、その他にも国際交流、青少年活動の金銭的支援先の決定など、様々な活動を行っているのがユース・デモクラシー・フォーラム(Youth Democracy Forum：以下 YDF)である。国際交流プログラムにおいてスコットランドの取り組みに刺激を受けた若者が提案し、それを政治家が支持したことによって生まれたという。専門職であるユース・コーディネーターが就き、秘書的役割を担っている。ユース・コーディネーターを就ける理由として若者は絶えず動く(引っ越ししたりする)から動かない大人が必要という考えである。現在理事会メンバーは4人で過去最高が17人である。

YDFのミーティングは原則公開となっており、数年おきに冊子を作って議会に提出している。特徴としてどの議員にも電話ができるという。そして年単位の時間はかかるものの、議会からのフィードバックを行っている。現在クリスティネハムンにあるスケートボード場はこの冊子内の要望としてあったもので、作ってほしいという若者と議員を繋ぐことによって実現に導いたという。



平等、統合、環境、障害という四つの観点から、毎年行政を点検するという宣言として議会の作った『子ども・若者政治行動プログラム』があるがこれにも YDF が関わった。そしてこのプログラムのもと、行政から毎年職員の仕事についての評価が議会に対して報告される。その評価がユース・コーディネーターに届けられ、YDF がコメントを付けて、議会で発表する。YDF のコメントは、批判的だが、議員には喜ばれ、逆に評価を頼まれることもあるという。そしてこれはメディアに公開される。このようなことを行う理由として、若者には政治家にない視点があり、見えないものが見えるからだという。

そして「ユースクリップ」という15歳～30歳までの若者が企画する若者のための青少年活動に対して10000SEK(日本円で約10万円程度)を上限に助成する事業があるのだが、どのプロジェクトにお金をかけるかはYDFの判断に任されている。

YDFは自分たちの要望を実現するために、ミーティングだけではなく地域に入って、まちづくりのための意見をもらうこともしている。現在YDFでは生徒会(student council)及びユースクラブとの関係づくりを目指しており、そのために、政治家から情報を集めたり、学校やユースクラブに出向いたりしている。そういった意味でYDFは孤立した組織ではなく、地域とのつながりを持った組織である。

Democracy café (デモクラシー・カフェ)

-ユース・コーディネーターと YDF の共同

昨年からはまった企画で、ユース・コーディネーターと YDF が共同で行っているプロジェクトである。若者に限らずすべての市民が政治家と直接意見交換をすることが目的である。政治家を普通の人と思ってほしいということだ。政治家は毎回最低でも 3 人ほど来てもらい、時には 10 人以上になることもある。

場所は、公園、ユースクラブ、学校など様々な場所にテーブルとイスを置いて行う。大きなイベントの一部として行うことも多い。学校から依頼があった時は来てもらうこともある。

意見交換する際の問いは「民主主義とは何か」「多様性 (diversity) とは何か」といった話をしているうちに、この町のために、社会のために、何を望んでいるかという話になるということだ。

ギリシャの NGO が主催する国際交流プログラムへの参加

クリスティネハムンでは若者の国際交流の支援も行われており、2000 年ごろからギリシャの NGO が主催する交流プログラムに同市の若者が参加している。一番最近のプログラムではギリシャ、シチリア、ブルガリア、スウェーデンから 10 人ずつ参加し、クリスティネハムンからは四つの NGO、社会民主党(SSU)政党青年部、ボードゲームのクラブ、聖歌隊、YDF のメンバーが参加した。

費用はギリシャの NGO が、EU の助成で実施しているため EU が現地での費用は 100% 負担し現地との間の交通費は 20% 負担している。残りの足りない部分はクリスティネハムンが負担している。

このプログラムの成果として充実した時間を過ごせた。国際的にも友達ができ Facebook など継続的に連絡を取り合えるようになった。スケートボードフェスティバル、ボランテアなどの新たな協同事業のきっかけになったという報告があった。

この交流プログラムをきっかけとして、YDF に参加する人もいる。



国際交流プログラム報告会

クリスティネハムンの若者に対する考え方

1. 町の若者をつながりを持つ

クリスティネハムンで特徴的なのが、若者との関係づくりをととても積極的に行っているところである。そしてそれらの手法は時代に合わせて変えていかなければならない。現在は Facebook を主に利用しているが、いつかそれも変わることも予想していた。そういった情報発信に関する柔軟な対応がなされていた。

また、時には若者の意見を集めるためにメールを 2000 人くらいに送ることもあるという。

若者をつながりを持つときに大事ななのは、どんな手段を使うかではなく、どのように人とつながるかであるという。より多くの若者を巻き込むためには、より多くの若者のアイデアが集まるようにすること、異なる問題に触れてもらうことも大事なのである。

また、多くの若者が参加できるようにするために学校との連携が不可欠となる。生徒会との連携や democracy café の会場を学校にするといったことから、YDF の活動のために学校を休んでもいいように学校側が理解してくれるようにする働きかけまで行っている。

学校に関して言えば、民主主義を「学ぶ」場ではなく、「行う do」の場になってほしいという。机上の論理だけではなく、実際の経験を通して民主主義とはなにか、民主主義を「行う」こととはなにかを学ぶことが必要。

そして、そんな若者にとって大切なことは若者が自分たちの意見が町にとって大切だと感じてもらうことだという。

2. 議員アンネ・マリーさん⁹の言葉（抜粋）

若い人とともに、よい意思決定をすることが大事であり、それは未来のための計画を若者ととともにするということである。若者には、どんな問題であれすべての問題を議論してもらう。そもそも、若者だけの問題などない。政治のすべての局面に若者の影響を確保する必要がある。若者は、大人とは異なった人生を送っている。世代間の違いがあることはスウェーデンでも日本でも同じである。そこで、大人と若者は双方を必要としている。この町をよくするために若者が必要なのだ。



お昼ご飯を頂く
手前左：Thereseさん 右：Åsaさん



高校の卒業式後のパレード

⁹ マリーさんは、議員の傍ら保育園の先生をしており、この考え方を保育園でも実践している。

感想

櫻井龍太郎

今回スウェーデンを訪問したのはちょっとした好奇心からであったが、受けた衝撃はとて大きかった。まず、スウェーデンにおいてとことん「民主主義」が考え方の根底に染みみついていることである。日本においては民主主義がなんたるかを考えることはなかったであろう。しかし、スウェーデンにおいてあらゆる若者施策が民主主義を貫いているのである。その結果が「生まれた時から社会の一員」であり、若者が参画する理由は「市民なのだから参画するのは当たり前」なのである。社会が若者を必要とし、若者もそれに応えていた。自分が社会に必要とされていることを感じるから社会全体を居場所として感じることができ、自分が社会から外れた人間だと思ふようなこともない。たとえ社会から外れたとしても引き戻してくれる。そして自己実現を体感することができるから自己肯定感を培うことができ、アイデンティティの形成にも繋がる。そういった一連の流れがスウェーデンの若者施策に感じる事ができた。

果たして日本はどうであろうか。若者には責任能力がない。若者の言うことを聞くのは我が儘を聞くようなものだ。道を外れた者は自己責任。そのような社会で本当に若者は成長できるのだろうか。こんな社会で育てて20歳になっていきなり「はい、じゃあもう大人だから国のこと考えて選挙に行ってね」と言われてもできるわけがないだろう。

根本的な考え方の違いを今回の視察では強く感じた。日本でも若者が社会の一員として認められ、参画することができるようにしたい。そのために今、私ができることを尽力していきたい。

逢坂郷実

今回この視察へ行くことになったきっかけは単純なものからだった。私が静岡県立大学で活動している中高生の社会参画活性化の活動をしているYEC（若者エンパワメント委員会）を創設した、たっぺいさん（両角達平）（ストックホルム大学に留学中で今回通訳と視察のコーディネーターをおこなってくれた）のひとことがきっかけだった。「スウェーデンおいでよ!視察ももちろん案内するよ!」この一言だった。私はその言葉を聞いた瞬間に何も考えず「行きたいです!」と返事をしていた。その時の私は「自分で」先進的な取り組みをしている現場を見てみたい!自分で行けば何かがみえる!!そう思っていた。今振り返るとあの時の何も深く考えない選択はわたしにとっての大きなきっかけを残していつてくれた。RRRの木田龍太郎くんを誘ったのもほんの偶然だった。佐野仁美さんも一緒に行くことになり3人でたくさん準備をしてきた。私は頼りないリーダーだったがこの3人で若者の社会参画の可能性を見えて活動できている仲間ができとても心強い。

今日本に問題はたくさんある。若者だけでなく大人も生きづらい社会である。手を取り合ってみんなで支えて幸せに生きていこうとしているスウェーデンの人々の姿がとても印象的であった。スウェーデンも日本も社会問題は絶えないが圧倒的に違うのは社会の問題はみんなの問題、社会も若者もお互いを必要としているそんな信頼感があった。ユースワークとはなんであろうか。少なくともスウェーデン視察で感じたことは、若者を守るでもなく、一緒に社会をよくしていける存在だと認識し、若者の力を信じてともに日々こつこつ社会をよくするために活動をしている姿だった。それはYECの活動もそうである。若者も大人も対等に手を取り合いながら社会をよくするために行動する。不思議とそんな彼らはキラキラしていてとても豊かな人々であった。ユースワークの役割とは社会と若者の橋渡しだと思う。スウェーデンの経験を経て、今後も私はこの分野の活動で頑張っていきたいと強く思った。

佐野仁美

2年前、YECと一緒に活動していた2人の仲間が、スウェーデンの若者参画を訪ねるスタディツアーに参加しました。帰国した彼らが語る「民主主義」「若者は問題ではなく社会の資源」などの言葉にわくわくさせられ、いつか本物を見に行きたいと思うようになりました。そして今回の視察というチャンスを得て、ようやく訪れたスウェーデンは、私の想像以上に若者を元気にさせてくれる国でした。

スウェーデン滞在中に、デモクラシーという言葉をさまざまな場で何度も耳にしました。みんな根本では民主主義を本当に大切に思っていて、それが若者参画を支えている。クリスティネハムン市議のアンネ・マリーさんは、小学校に入る前の小さな子どものうちから民主主義の「やり方」を教えると話していました。でも、民主主義って何だろう？私が中学校や高校の社会の授業で学んだようなとは、政治の仕組みとしての民主主義という意味だけではないことは明らかで、ましてや自分がどうやって民主主義を実行するかなんて教わることはありませんでした。

人と人が対等にかかわること、お互いを尊重する人たちのかかわりの中で物事を決めて社会を動かしていくことが民主主義ということなのかな、と今は思います。スウェーデンでは、若者も大人もお互いが尊重し合い必要とし合って、声を出し合って、社会をよくしていこうとしていました。そしてそれは、お互いに注意深く丁寧にかかわることで可能になることで、決して難しいことではないように感じました。お互いそんなふうにつながり合える社会と、今度は日本で出会えるようになるために、まずは私が民主主義の実行者になりたいと思いました。

あしがき

スウェーデンでは、若者の声がかれ、若者が意思決定に参加し、若者の居場所を若者自身がつくりだしている場面が数多くみられた。

若者の意見も、社会のメンバーの一員の意見として大切に受けいられていた。それは、これからの社会を担う若者を育てるために必要だからという理由だけでなく、今の社会を共につくる大人と対等な一人として意見を聞くのが当たり前だから聞いている、とまで考えられていた。若者が社会の一部であると感じられた。

若者と政治家との距離がとて近く、若者の話を政治家が積極的に聞こうとしていた。若者議会はアイデアを実現するのに十分な権限と予算をもっていた。行政が Facebook を使って若者の声を聞くなど、若者が実際に利用しやすいツールを臨機応変に取り入れていた。若者は、若者に直接的にかかわる問題だけではなく、すべての問題に対して意見を聞かれていた。

そうやってつくられたまちは、若者も大人も「参画」をとおしてつなぎとめられたまちななる。「参画」の大切さがどこでも考えられていて、例えばスポーツなどの楽しい活動においても、自分のやりたいことを仲間と話し合い決定し実現する、グループに「参画」することがとて大切にされていた。

日本でもこのような、若者が参画できるような、声を発したいと思うような機会を増やすことが必要である。そして、若者も大人も対等な社会の一部として大切にされるように、社会の仕組みを整え、若者と大人の双方の意識を変えていくことが求められる。

スウェーデン若者参画視察報告書

2012年10月5日初版発行

発行 YEC(若者エンパワメント委員会)
<http://youth-empowerment.jimdo.com/>
RRRプロジェクト
<http://rrrpj.com/>